国際社会文化研究所紀要　第6号（2004年）

ボランティア・イメージと活動経験の連関性

大束貢生[*1]　柴田和子[*2]　湯川宗紀[*3]

About the relationship between student's volunteer image and activity experience

Takao Otsuka[*1], Kazuko Shibata[*2] and Muneki Yukawa[*3]

We analyzed student's volunteer image from the opinion poll carried out for the student. As a result, students are holding these image of "spontaneousness", "gratuitousness", "public responsibility", "self-actualization", and "a social-change" in the volunteer. In view of the relation between this image and activity experience, the feature of student's volunteer image was considered to be "activity for self-actualization". Therefore, it is conjectured to be the factor, which the student performs a volunteer activity continuously, that he considers the activity for him to be attained self-actualization.

1. 問題の所在

この小論の目的は，学生のボランティア・イメージを分析することによって，学生のボランティア活動に関するいくつかの特徴について考察を加えることにある。

1995年の阪神・淡路大震災でのボランティア活動に対する注目以降，ボランティア活動をめぐる状況には「ボランティア活動をする行為者」「ボランティア団体」「行政」それぞれの関係において劇的な変化がもたらされた。それは，各種統計でのボランティア活動をしてみたい人々の増加，NPO法の制定（1998年），文部科学省・中央教育審議会答申「青少年の奉仕活動・体験活動の推進方策等について」(2002年)，行政や学校団体によるボランティアセンターの設立などに現れている。

こうしたボランティア活動に対する変化に伴う形で，ボランティア活動が個人や社会にもたらす変化についても様々な見解がなされるようになっている。古くは「自発性」「無償性」「社会奉仕」などの言葉で語られてきたボランティアが，「楽しい」「自己実現」といったボランティア（金子郁容　1992），そして「社会参加」「社会変革」「公共性の主体」としてのボランティア（入江幸男1999）といった言葉でも語られるようになってきた。

従って以下では，学生のボランティア・イメージを分析することで，「社会奉仕」「自己実現」「社会参加」といったボランティア活動に対する見解が，どのように学生のイメージとして浮かび上がってくるのか，また，こうしたイメージがどのような社会的背景から出現してきているのかについて考察を行いたいと思う。

＊1 佛教大学社会学部，＊2 龍谷大学社会学部，＊3 龍谷大学社会学部

2. 調査の概要

1997年に行った「活動当事者のボランティア・イメージに対する自由回答調査」の結果をもとにして，ボランティア・イメージに関する21項目を作成し，「学生のボランティアに関する意識調査」を行った（期間：2002年７月～10月，調査方法：共同研究者が出講している大学の受講生を中心に授業中に配布・回収，有効回答数：870票）[1]。

3. 結果と考察

3.1. 単純集計からみたボランティア・イメージ

表１は，ボランティア・イメージ21項目の単純集計である。回答は「まったくそう思う」から「まったくちがう」までの７件法に基づいており，平均値のスコアが高いほど「まったくそう思う」の割合が高い（最高値：７，最低値：１，中間値：４）。

表１によれば，もっとも平均値の高い上位４項目は「自発的に行われるもの（平均値5.94，以下同）」「積極的に行われるもの（5.77）」「無償で行われるもの（5.71）」「責任を持って行われるもの（5.70）」といった項目である。これらは，従来からあるボランティア・イメージ項目と考えられるが，学生の多くもこうしたボランティア・イメージを持っていることが示されている。第５位・第６位は，「当人の人間的成長に役立つもの（5.44）」「他人の評価を気にせず行われるもの（5.29）」といった項目である。この項目は自己に役立つというイメージであり，「自己実現」タイ

表１　学生のボランティア・イメージの単純集計

	度数	平均値	標準偏差
自発的に行われるもの	866	5.94	1.28
積極的に行われるもの	868	5.77	1.44
無償で行われるもの	868	5.71	1.45
責任を持って行われるもの	868	5.70	1.26
当人の人間的成長に役立つもの	868	5.44	1.41
他人の評価を気にせず行われるもの	868	5.29	1.56
社会のために行われるもの	867	5.27	1.49
困っている人を助けるもの	868	5.27	1.38
人間関係を豊かにするもの	868	5.02	1.34
社会的な問題解決に向けて行われるもの	868	4.98	1.41
地球のために行われるもの	868	4.91	1.48
当人がやりたいことを行うもの	868	4.90	1.53
次世代の人々のために行われるもの	867	4.34	1.35
日常的な生活の一部として行われるもの	868	4.17	1.42
当人の負担にならないもの	868	4.15	1.59
価値の実現のために行われるもの	863	4.05	1.34
すべての人がするべきもの	868	3.33	1.60
学校や地域から課されて行うもの	868	3.06	1.51
自分を犠牲にして行うもの	868	2.91	1.53
行政の指導によって行われるもの	867	2.89	1.45
実利的な見返りを目的として行われるもの	864	2.30	1.44
有功なケースの数（リストごと）	857		

プのボランティア・イメージと考えられる。第7位・第8位は「社会のために行われるもの（5.27)」「困っている人を助けるもの（5.27)」であり，「社会変革」タイプのボランティア・イメージや「社会奉仕」タイプのボランティア・イメージと考えられる。

逆に「すべての人が行うもの（3.33)」「学校や地域から課されて行うもの（3.06)」「自分を犠牲にして行うもの（2.91)」「行政の指導によって行われるもの（2.89)」「実利的な見返りを目的として行われるもの（2.30)」といった項目は，ボランティアではないと考える学生の割合が多い。中教審の進める社会奉仕活動は学校が課するという点において，ボランティア活動とは一線を引くものであると学生も考えているようである。

以上のように，学生のボランティア・イメージは従来からボランティアに必要と考えている項目が高い割合であるが，金子や入江のいう「自己実現」「社会変革」といったボランティア・イメージも次に割合が高く学生に支持されていると考えられる。

3.2. ボランティア・イメージの分類

さて，このボランティア・イメージをいくつかにカテゴリー分けするために，21項目を用い主成分分析を行った。表2はその結果である。主成分分析の結果，6成分が析出された。

第1成分は，「地球のために行われるもの（0.762)」「社会的な問題解決に向けて行われるもの（0.740)」「社会のために行われるもの（0.649)」「困っている人を助けるもの（0.632)」といった項目に正の負荷が高かった。これは，社会・公共的な問題への解決志向が強い項目と考えられる。したがって第1成分を【公共性】成分と考えた。

第2成分は「学校や地域から課されて行うもの（0.852)」「行政からの指導によって行うもの（0.833)」「実利的な見返りを目的として行うもの（0.667)」といった項目に正の負荷が高かった。この分類は，他者から課されて行う他律的な傾向が強い項目である。したがって第2成分を【他律的】成分と考えた。

第3成分は，「人間関係を豊かにするもの（0.680)」「当人の人間的成長に役立つもの（0.615)」「価値の実現のために行うもの（0.614)」「責任を持って行われるもの（0.578)」に正の負荷が高かった。この分類は，ボランティア活動は当人の人間関係作りに役立つなど，当人の自己実現に役立つものと考えられる。したがって第3成分を【自己実現】成分と考えた。

第4成分は，「無償で行われるもの（0.740)」「自発的に行われるもの（0.669)」「積極的に行われるもの（0.567)」といった項目に正の負荷が高かった。この分類は，従来からボランティア活動のイメージとして語られてきたことであり，ある意味でステレオタイプ的な項目とも考えられる。したがって第4成分を【従来型】成分と考えた。

第5成分は，「すべての人がするべきもの（0.717)」「日常的な生活の一部として行われるもの（0.680)」に正の負荷が高かった。これは，ボランティア活動はすべての人が何らかの形で行うことが重要ということを示すと考えられる。したがって，第5成分を【日常性】成分と考えた。

第6成分は，「当人の負担にならないもの（0.792)」「当人がやりたいことを行うもの（0.599)」に正の負荷が高かった。これは，ボランティア活動にのめりこまずに行う，ちょっとしたボランティアという意味と考えられる。したがって第6成分を【ちょボラ】成分と考えた。

これら6分類を1997年の「活動当事者のボランティア・イメージに対する自由回答調査」の結果

表2　学生のボランティア・イメージの分類

	成分					
	1	2	3	4	5	6
地球のために行われるもの	0.762					
社会的な問題解決に向けて行われるもの	0.740					
社会のために行われるもの	0.649					
困っている人を助けるもの	0.632					
次世代の人々のために行われるもの	0.476		0.435		0.409	
学校や地域から課されて行うもの		0.852				
行政の指導によって行われるもの		0.833				
実利的な見返りを目的として行われるもの		0.667				
人間関係を豊かにするもの			0.680			
当人の人間的成長に役立つもの			0.615			
価値の実現のために行われるもの			0.614			
責任を持って行われるもの			0.578			
無償で行われるもの				0.740		
自発的に行われるもの				0.669		
積極的に行われるもの				0.567		
すべての人がするべきもの					0.717	
日常的な生活の一部として行われるもの					0.680	
他人の評価を気にせず行われるもの						
当人の負担にならないもの						0.792
当人がやりたいことを行うもの						0.599
自分を犠牲にして行うもの						−0.415

因子抽出法：主成分分析
回転法：kaiserの正規化を伴うバリマックス法
固有値：1.368，6因子累積寄与率：57,465%　±0.4未満省略

（図1）と比べてみると，【公共性】成分は⑥の「奉仕性」の中にその項目が認められる。活動当事者の「奉仕性」を，「他人や社会の役に立つ」ことが「自己犠牲」や「奉仕」と共通するものであると捉えたが，学生のボランティア・イメージでは，「自分を犠牲にして行うもの」という項目は，【公共性】成分と結びついておらず，【ちょボラ】成分と名付けた項目においてマイナスの形で現れている。ボランティアに伴う「自己犠牲」「奉仕」イメージに対しては，入江が，限界があると述べているが（1997：12），学生にとっては，もはやボランティアと対極的なイメージでしかないことを物語っているのではなかろうか。

逆に【自己実現】成分は②の「無償性」の中にその項目が認められる。「人間関係が豊かになる」という内容を活動当事者の意見での「金銭を求めない」ことと結びつけたが，学生にとっては「精神的なもの」と「物質的なもの」の対峙以外のイメージがあると考えられる。むしろ活動当事者での③「関係性」と名付けた項目に近いと考えられる。

また活動当事者の①「自発性」②「無償性」の項目は【従来型】といったイメージにまとめられた。学生にとっては「自発性」「無償性」はボランティア活動にとって当たり前のことであり，それ故「自発性」をイメージした学生は「無償性」もイメージするといった回答傾向となったと考えられる。加えて，【日常性】成分と【ちょボラ】成分であるが，活動当事者では⑤「日常性」にまとめられていると私たちは考えた。しかし学生は「日常的な生活の一部として行うもの」と「当人

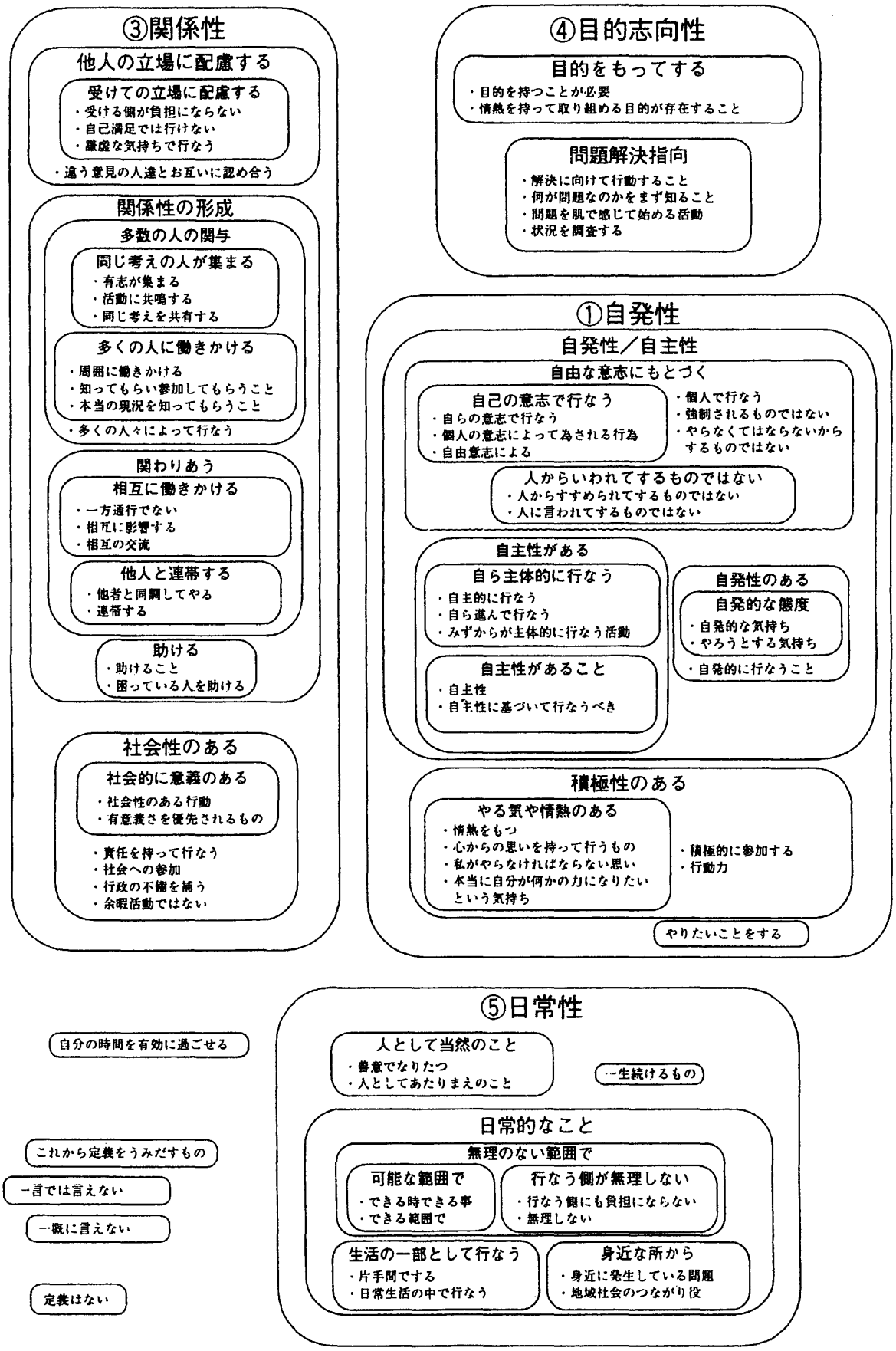
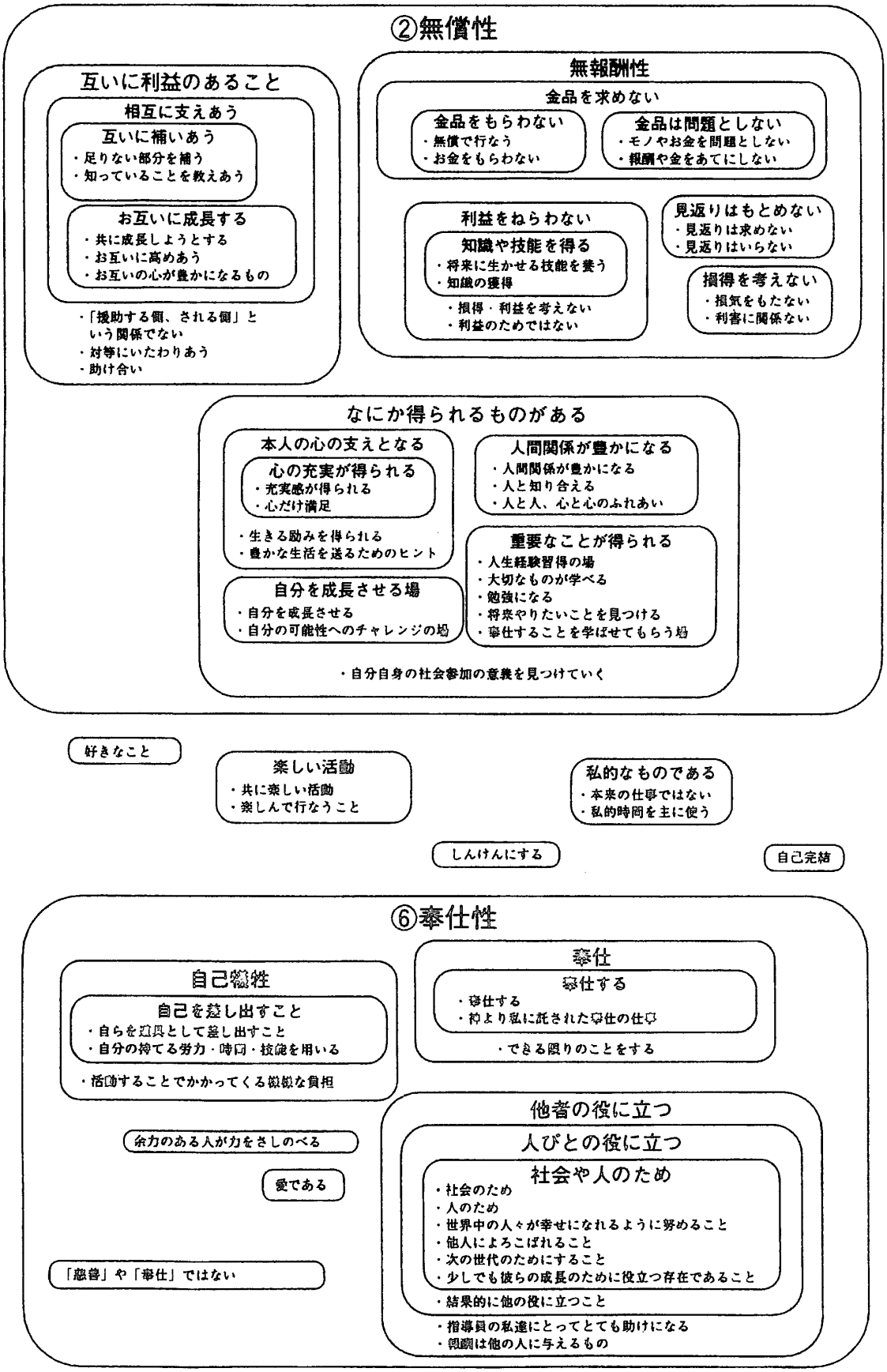


図１　「活動当事者のボランティア・イメージに対する自由回答調査」の結果


②無償性
互いに利益のあること
相互に支えあう
互いに補いあう
・足りない部分を補う
・知っていることを教えあう
お互いに成長する
・共に成長しようとする
・お互いに高めあう
・お互いの心が豊かになるもの
・「援助する側、される側」という関係でない
・対等にいたわりあう
・助け合い
無報酬性
金品を求めない
金品をもらわない
・無償で行なう
・お金をもらわない
金品は問題としない
・モノやお金を問題としない
・報酬や金をあてにしない
利益をねらわない
知識や技能を得る
・将来に生かせる技能を養う
・知識の獲得
・損得・利益を考えない
・利益のためではない
見返りはもとめない
・見返りは求めない
・見返りはいらない
損得を考えない
・損気をもたない
・利害に関係ない
なにか得られるものがある
本人の心の支えとなる
心の充実が得られる
・充実感が得られる
・心だけ満足
・生きる励みを得られる
・豊かな生活を送るためのヒント
人間関係が豊かになる
・人間関係が豊かになる
・人と知り合える
・人と人、心と心のふれあい
重要なことが得られる
・人生経験習得の場
・大切なものが学べる
・勉強になる
・将来やりたいことを見つける
・奉仕することを学ばせてもらう場
自分を成長させる場
・自分を成長させる
・自分の可能性へのチャレンジの場
・自分自身の社会参加の意義を見つけていく
好きなこと
楽しい活動
・共に楽しい活動
・楽しんで行なうこと
私的なものである
・本来の仕事ではない
・私的時間を主に使う
しんけんにする
自己完結
⑥奉仕性
自己犠牲
自己を差し出すこと
・自らを道具として差し出すこと
・自分の持てる労力・時間・技能を用いる
・活動することでかかってくる微細な負担
奉仕
奉仕する
・奉仕する
・神より私に託された奉仕の仕事
・できる限りのことをする
他者の役に立つ
人びとの役に立つ
社会や人のため
・社会のため
・人のため
・世界中の人々が幸せになれるように努めること
・他人によろこばれること
・次の世代のためにすること
・少しでも彼らの成長のために役立つ存在であること
・結果的に他の役に立つこと
・指導員の私達にとってとても助けになる
・報酬は他の人に与えるもの
余力のある人が力をさしのべる
愛である
「慈善」や「奉仕」ではない

の負担にならないもの」を別々の項目として捉えている。

したがって，活動当事者のボランティア・イメージと学生のボランティア・イメージはかなり食い違っている点のあることが推測される。また，この食い違いがボランティア活動をする際の団体側とボランティア希望者の軋轢を生んでいると考えられる。さらに学生にとっては，ボランティア活動は「自己実現」のために行うと考えられているが，当事者側はその学生のボランティア動機を「従来型」のボランティア・イメージで捉えがちであることが推測される[2)]。

3.3. ボランティア・イメージを規定する要因

次に以上のボランティア・イメージの分類を規定する要因を考察するために，属性や本人や家族のボランティア活動経験との関係を展開したい。

3.3.1. 性別・15歳時の居住地域

性別とボランティア・イメージの分類では（表3），【自己実現】成分において違いが現れた。すなわち，女性は男性に比べてボランティア活動に「自己実現」的なイメージを持っているようである。「自己実現」は現在の自己の現状と関係があると考えられる。女性の学生の方が，自己を否定的に見たり，自己を見失ったりすることが多いのだろうか。

15歳の頃の居住地域とボランティア・イメージの分類では（表4），滋賀県居住者は【公共性】【他律的】【自己実現】【ちょボラ】成分に特徴があらわれている。「社会や人のために言われたことを厭わず継続的に行う」というイメージが一方であるが，これは滋賀県の地域が「伝統的地域社会」がまだ存続している社会であり，ボランティアが近隣コミュニティでの伝統的な助け合いと考えられたからかもしれない。

神戸市居住者は【公共性】【自己実現】【日常性】成分に特徴が現れている。神戸市居住者を他の地域と区分したのは，阪神淡路大震災時に当該学生が被災地に居住し，災害時のボランティア活動（震災ボランティア）を間近に見る，あるいは当人が行った機会があったのではないかと想定したからである。特徴としては【自己実現】成分がマイナスになっていることがあげられる。震災時のボランティア活動を見るものにとっては，ボランティア活動とは「自分探し」や「自分のために行う」あるいは「自己の楽しみのために行う」こととは考えられないのかもしれない。また【日常性】成分に関しても，「震災ボランティア」と呼ばれた活動が一過性のものであったことから，「継

表3 学生のボランティア・イメージの分類

性別	公共性	他律的	自己実現	従来型	日常性	ちょボラ
平均値						
男性	−0.066	−0.010	−0.125	−0.032	−0.050	−0.106
女性	0.060	0.003	0.107	0.039	0.050	0.085
合計	0.003	−0.003	0.003	0.007	0.005	0.000
標準偏差						
男性	1.127	1.111	1.137	1.120	1.065	1.076
女性	0.882	0.895	0.862	0.873	0.930	0.932
合計	1.000	0.996	1.000	0.991	0.993	1.002

表4　15才の時の居住地域とボランティア・イメージの分類

15才の時の居住地域	公共性	他律的	自己実現	従来型	日常性	ちょボラ
平均値						
滋賀県	0.122	0.153	0.254	−0.058	−0.034	−0.114
京都府	0.037	−0.109	0.002	−0.070	0.067	0.056
大阪府	−0.077	−0.161	−0.032	−0.132	0.024	0.033
神戸市	0.127	0.076	−0.158	−0.057	−0.124	−0.042
兵庫県（神戸市を除く）	0.039	−0.031	0.055	0.087	−0.075	−0.043
その他	−0.094	0.062	−0.026	0.082	0.056	0.050
合計	0.000	−0.003	0.003	0.006	−0.005	0.003
標準偏差						
滋賀県	0.798	1.035	0.788	1.007	1.082	0.912
京都府	1.031	0.970	1.025	1.032	0.929	1.091
大阪府	0.986	0.941	1.021	1.058	1.043	1.049
神戸市	0.928	1.075	1.023	1.004	0.960	0.995
兵庫県（神戸市を除く）	1.039	1.021	1.039	0.920	1.005	1.026
その他	1.032	0.969	0.991	0.993	1.006	0.948
合計	0.999	0.997	1.001	0.995	1.001	1.001

続的に行う」こととボランティア・イメージが結びつかなかったと考えられる。こうした特徴からは，経験したボランティア活動の種類によって，ボランティア・イメージが変化していることが推測される。

3.3.2.　ボランティア経験とボランティア継続意志

自己のボランティア経験とボランティア・イメージの分類（表5）では，自己のボランティア活動の経験を学校や地域に課されて行った（他律的）と自ら進んで行った（自発的）に分け，「自発なし・他律なし」「自発なし・他律あり」「自発あり・他律なし」「自発あり・他律あり」「自発あと・他律さき」の5つに分類した[3)]。

「自発なし・他律なし」というこれまでボランティア活動を行ったことのない学生では，〖自己実現〗成分と〖日常性〗成分にマイナスが現れた。「自己実現」についてのマイナスについては，ボランティア未経験者は，ボランティア活動は自己実現につながらない，また自己実現を求めなくてもいい人々であるからかもしれない。現代の学生にとって，自己実現のために行っている活動は様々であり，あえてボランティア活動に求めなくてもいいのかもしれない。またボランティア活動を行わない人々にとっては，ボランティア活動は縁遠いものであり，身近なところで行われている活動であると考えていないのかもしれない。逆に「自発あり・他律あり」というボランティア経験者がボランティア・イメージを〖日常性〗と捉えていることから考えても，身近に感じるかどうかはそれまでに経験しているかどうかによると思われる。

さらに，中教審のいう「社会奉仕活動」の導入がボランティア活動を活発にするのかについて「自発なし・他律あり」と「自発あと・他律さき」を比較すると，「自発なし・他律あり」では〖従来型〗成分にプラスの評価が，「自発あと・他律さき」では〖自己実現〗成分にプラスの評価

表5　自己のボランンティア経験とボランティア・イメージの分類

PATN5	公共性	他律性	自己実現	従来型	日常性	ちょボラ
平均値						
自発なし・他律なし	−0.075	−0.002	−0.167	−0.046	−0.314	−0.027
自発なし・他律あり	0.095	0.022	−0.037	0.120	0.028	−0.082
自発あり・他律なし	−0.058	−0.145	−0.001	−0.062	0.075	0.090
自発あり・他律あり	0.022	0.056	0.068	0.016	0.130	0.058
自発あと・他律さき	−0.143	0.005	0.216	0.070	−0.136	0.012
合計	−0.003	0.010	0.015	0.029	0.002	0.010
標準偏差						
自発なし・他律なし	1.155	1.096	1.137	1.160	1.120	1.080
自発なし・他律あり	0.944	0.933	0.861	0.870	0.985	0.979
自発あり・他律なし	1.051	1.054	0.899	1.041	0.866	0.977
自発あり・他律あり	0.976	0.996	1.024	0.941	0.944	0.924
自発あと・他律さき	0.776	0.993	1.046	0.905	0.908	0.998
合計	0.987	1.003	0.997	0.969	0.981	0.976

表6　ボランティア活動の継続意志とボランティア・イメージの分類

ボランティア活動の継続意志		公共性	他律的	自己実現	従来型	日常性	ちょボラ
平均値	肯定	−0.050	−0.050	0.175	0.071	0.209	0.002
	否定	−0.042	0.047	−0.349	−0.089	−0.567	−0.014
	合計	−0.048	−0.024	0.035	0.029	0.002	−0.002
標準偏差	肯定	1.002	0.972	0.927	0.940	0.932	0.943
	否定	1.055	1.021	1.216	1.178	1.016	1.143
	合計	1.016	0.985	1.038	1.010	1.015	0.999

が【公共性】と【日常性】成分にマイナスの評価があった。すなわち「自発なし・他律あり」では他律的に課されたボランティア活動に「自発的に行う」「無償で行う」以上の意味が感じられず，「自発的に行うものである」なら「別に行わなくてもよい」という意味合いが感じられる。逆に「自発あと・他律さき」ではボランティア活動は社会のためではなく「自分のために」行うものであるという意味合いが見て取れる。したがって一律に他律的に行っても，その後にボランティア活動を継続して行うかどうかについては，行ったボランティア活動が学生の「自己実現」というニーズに適合するかどうかが焦点となるであろう。一律にボランティア活動を行っても継続して活動を行うかどうかについては，学生自らがボランティア活動にどのような意味を見出すのかによっていると考えられる。ところで「自発あと・他律さき」である学生は【公共性】と【日常性】成分に対してもマイナスの評価を下している。これは「自発あと・他律さき」である学生はボランティア活動を「社会や他人のため」と考えていないことが読み取れる。また自己実現が達成されれば，ボランティア活動から離れてしまう危険性を示唆している。まとめると，たとえ他律的にボランティア活動を行ったとしても，学生自らがボランティア活動にどのような意味合いを見出すのかによってその後継続的に活動を行うかが区分され，さらにたとえ継続的に行ったとしてもボランティア活動を「自分のために」行う傾向があるといえよう。中教審答申では「社会奉仕活動」の導入を「人をいたわる心を養う」という目的があると謳うが，他律的なボランティア活動が「人をいたわる心を

養う」という結果を導くのかどうかについてはかなり疑問であると言わざるを得ない。

ボランティア継続意志との関係では（表６），【自己実現】成分と【日常性】成分に違いが現れた。継続意志のある人はボランティアを「自己実現のために」「日常的に行う」と考えており，継続意志のない人はボランティアを「自己実現には結びつかず」「非日常的に行う」と考えている。これも学生のボランティア活動の特徴が「自己実現のための日常的な活動」と考えられているからであると考えられる。

4. 要約と課題

4.1. 要　約

この小論の目的は，学生のボランティア・イメージの分類を分析することによって，学生のボランティア活動に関するいくつかの特徴について考察を加えることにある。2002年に行った「学生のボランティア活動に関する意識調査」を行い，統計パッケージ（SPSS11.0J）によって統計処理を行った。

この統計処理から見ると，学生のボランティア・イメージは従来からボランティアに必要と考えられている項目が高い割合となるが，金子や入江のいう「自己実現」「社会変革」といったボランティア・イメージも次に割合が高く，学生に支持されていると考えられる（以上3.1.）。

また，活動当事者のボランティア・イメージと学生のボランティア・イメージはかなり食い違っているところがあることが推測される。この食い違いがボランティア活動をする際に団体側とボランティア希望者の軋轢を生んでいると考えられる。特に学生にとっては，ボランティア活動は「自己実現」のために行うと考えられているが，当事者側はその学生のボランティア動機を「従来型」のボランティア・イメージで捉えがちであることが推測される（以上3.2.）。

こうした学生のボランティア・イメージを規定する要因を属性や過去のボランティア経験から解釈すると，自己実現タイプのボランティア活動がやはり鍵になっているようである。だから，他律的にボランティア活動を行わされたとしても，学生自らがボランティア活動にどのような意味合いを見出すのかによってその後継続的に活動を行うかが区分される。さらにたとえ継続的に行ったとしてもボランティア活動を「自分のために」行う傾向があるといえよう。中教審答申では「社会奉仕活動」の導入を「人をいたわる心を養う」という目的があると謳うが，他律的なボランティア活動がこうした結果を導くのかどうかについてはかなり疑問であると言わざるを得ない。（以上3.3.）。

4.2. 課　題

この結果から考えると，やはり学生のボランティア・イメージは「自己実現」に過度に偏っていることが推測される。この学生の「自己実現」というボランティア・イメージが，受け入れ側であるボランティア団体との間に何らかの問題を引き起こす可能性があるであろう。ではなぜ，学生において「自発性」「無償性」「奉仕性」といったボランティア・イメージに加え「自己実現」といったイメージが出現したのであろうか。それを考察するためには，今日の若者が「自分探し」や「アイデンティティの確立」になぜ取り込まれるのかについての考察も援用する必要があると思われる。また，ボランティア活動の広がりから，従来の「助け合い」イメージから「障害者・高齢者・途上国への援助」や「身近な環境や地球環境を守る」とったイメージへと変化していると思われる。学

生が具体的にどういった活動をボランティア活動と想定したのかによって，この小論での考察も随分変化すると思われる。特に震災ボランティアを経験していると想定した神戸市在住者が異なったボランティア・イメージを持っていたように。今回は割愛せざるを得なかったが，ボランティア活動内の区分とボランティア活動と社会との関係についてより広範な考察を試みることを今後の課題としたい。

注

1) 1997年の調査については大東貢生（2002）を，2002年の調査の基礎集計については湯川宗紀・柴田和子・大東貢生・大山治彦・古川秀夫（2003）を参照。
2) なお，今回は学生のボランティア活動に対する自己評価（問9）も尋ねている。ここで述べた食い違いが具体的にはどのような側面に現れてきているかについては古川秀夫・大東貢生・田中　滋・福田菊（2004）も参照のこと。
3) この自己のボランティア経験の分析は柴田和子・大東貢生・大山治彦・古川秀夫（2004）も参照のこと。

文献

古川秀夫・大東貢生・田中　滋・福田菊，2004,「ボランティア団体のニーズと大学生の意識との間の乖離」『龍谷大学国際社会文化研究所紀要』6号.
入江幸男，1999,「ボランティアの思想」内海成治・入江幸男・水野義之編『ボランティア学を学ぶ人のために』世界思想社，4-21.
金子郁容，1992,『ボランティア―もう一つの情報社会』岩波書店.
大東貢生，2002,「当事者の考えるボランティア」古川秀夫編『現代日本のボランティア像』龍谷大学国際社会文化研究所.
柴田和子・大東貢生・大山治彦・古川秀夫，2004,「ボランティア活動の動機における自発性と外発性」『龍谷大学国際社会文化研究所紀要』6号.
湯川宗紀・柴田和子・大東貢生・大山治彦・古川秀夫，2003,「「学生のボランティア活動に関する意識調査」中間報告」『龍谷大学国際社会文化研究所紀要』5号.